第２２７号

# 芥川だより

発行日＊２０２５年１２月１日　e-mail: ab_87968624@yahoo.co.jp
最新号から創刊号まで閲覧できます。 http:// akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集　川口　伸
発行人　下村嘉明
〒661-0951
尼崎市田能5-3-10-601
☎090-8796－8624

＊＊＊＊＊＊＊＊ 一部２００円です ＊＊＊＊＊＊＊＊

## まだ、運は残っているか？

運の良し悪しは、誰かが決める訳ではない自分で決めるもんだと、私は思っている。しかし、周りの人から「あんたは、運が強い」と言われると悪い気はしない。これまでずいぶん危険な目にあったが、何とか生き延びられたのは運が良かったからだと思う。

難病を患って 15 年が過ぎた。4 か月入院し退院する時に「まだ、運が残っていたんですね」と担当医から言われた言葉が忘れられない。もう一つ勇気を貰った言葉がある。それは、介護を続けていた義母の容態が悪く「死期はいつか」と聞きたくて占い師に見てもらった時に私に対して「あなたは、母方の先祖に完璧に守られている」と言われた時の驚きと自信である。それ以後、何か困ったことがあっても自分の運の強さを盾に生きてきた。

ところが、今回の病はなんとも不可解な病で自分の運も使い果たしたのではないかと考えるのだが、見方を変えれば、亡くなった家内も少し早いとも考えるが良い死に方だったと思えてくる。ながく寝たきりの状態が続くよりあっという間に亡くなった方が、本人にも家族にも良かったんだと思える。

私は、かねがね早く死にたいと医師にも伝えている。出来れば 75 までには、遅くても 80 までには死にたい。今回の病気は、私の願いをかなえてくれるかもしれない。最後の運を使って元気なままで一気に死ぬことが出来れば最高の人生である。先ごろ入院していた病棟で一日中「おかあちゃん、助けてなあー。早く死にたい」と叫び続けていた老婆がいた。老婆の声を聞きながら、ほんまに　そうやなぁとうなづく自分だった。

人生百年と言われて久しいが、私は御免こうむりたい。生きたい人は、大いに長生きして人生を楽しんで頂いたら良い。しかし、私はもう十分に人生を楽しんできたので何も思い残すことはない。心臓という思いもよらなかった病で死ねるかもしれない。運がまだ残っているなら、死ぬために使い切りたい。

## 死をめぐるあれやこれ（１３１）

石川　吾郎

### 奈良初冬

先日、数年ぶりに奈良に行った。京都で学生生活を送っていたころからだろうか、気が付くと、私は何かにつけ奈良・東大寺の三月堂を訪れるようになっていた。二三年に一度ということもあれば、十年を隔てて行くこともあった。後で考えればそれは人生の節目をなしていたのだった。◆今回も大仏殿を横に見て、春日の森ぬける坂を登り三月堂にやってきた。堂内に入り、仏たちの前で静謐な時間を過ごす。すると普段の生活とは違った穏やかな気持ちに満たされてくる。わが身と家族、そして私に関係をもってくれている人たちの安らかなことを祈る。◆今から思えば、若い時代には祈りというものを知らなかった。それは自ら無神論者だと思っていたからでもあるが、まだ自分にはさまざまな可能性があると信じ切っていた傲慢さがあったように思う。しかし今、老年を迎え残された時間の少ないことを自覚して、冷静に考えても多くのことは祈ることしかできないことが明らかになってきた。◆この御堂の仏、不空羂索観音の前に坐すと、そういった不安や心配がいつの間にか消えて、また日常にもどっていく力が注入されるような気がする。このことは、青年中年そして老年を迎えた今でも変わりはないのだ。◆ただ残念なことに一つだけ違和感がある。それはこれまで長年この御堂で対面してき

た、ご本尊の両脇におられた日光・月光両菩薩が今ではここで拝めなくなったことだ。両菩薩像は確かに、本来はここにおられたわけではなかったようだが、もう何百年かはここでおられたし、私の知っている三月堂は両菩薩のおわす御堂なのだ。両菩薩は東大寺ミュージアムに移されているというが、両菩薩の本来の場所はここだと感じる。東大寺は罪作りなことをなさる。◆だが私はまたここを訪れるだろう。しかし本当に来ることができるか、それは確かでない。この出会いが最後かもしれない。最後となってもいいようにと、ひそかにこころに刻んでおく。

## 芥川だより二二七号　目次


| | | |
|---|---|---|
| 巻頭エッセイ | 下村嘉明 | 1 |
| 巻頭コラム１３１ | 石川吾郎 | 1 |
| 素老人☆よもだ帳　１４１ | 坂本一光 | 2 |
| 哲学爺いの時事放談　９０ | 祖蔵哲 | 3 |
| ボケ老人の雑話　２１ | 明石幸次郎 | 5 |
| オクラの山たより　１１１ | 因了生 | 7 |
| 隠された歴史　８６ | 満田正賢 | 10 |
| 俳句 | 影山武司 | 12 |
| 編集後記 | ＳＫ生 | 12 |
| ふみの道草　９０ | 山椒魚 | 13 |


## 素老人☆よもだ帳（１４１）

坂本一光

◆私の学校―
人間はいつ自分になるか

小さいときから学校が嫌いだった。小学校に入学したとき迷路のような校舎群の端っこの教室に連れていかれ、明日からここに迷わず来られるだろうかと心配になった。敗戦直前生まれの兄の学年はたった一クラスしかなく三十名もいたか。戦後生まれの私の学年は三クラスあり一クラス五十名を越えていた。全校八百名を越える規模の学校だった。

それから数十年。中学も高校も大学も、私の母校にはならなかった。しかし、私にも母校と呼べる学校が三つ出来た。一つは、大学時代のサークル。二つ目は、働き出してから二年間校長をしたある附属中学校。そしてもう一つは、六十五歳から始めた番傘川柳である。

さて、番傘川柳本社・田中新一主幹の「川柳番傘」七月号巻頭言「川柳のススメ―川柳は人間学です」を読みながら、そうであったか、私は今、川柳を通して総合人間学を学んでいたのかと思った。巻頭言の最後に、「川柳の神髄は、人間を見つめるまなざしにあります。そしてその先には、自分自身を知るという大切な気付きが待っています」とある。川柳は、私という人間に関わる世界のあらゆることをうたう。そのとき、世界を見る者は自分を見るだろう。そう教えられた巻頭言であった。

以下の「放論」では、川柳という私の学校を支えるもう一つの私の学校、大学時代のサークル活動のことに触れたい

「人間はいつ自分になるか」―そう問いかけた哲学者・鶴見俊輔は、自分になるとは「社会の中の自分の位置に気づき、社会に向かって働きかける方向を決める」ことであり、人間は人と社会との関わりの中で「自分」になる。「そのとき、人が生まれる」と言った。一九七二年に筑摩書房から出版された「人が生まれる―五人の日本人の肖像」の「あとがき」にあった言葉である。

この本は、田中正造をはじめとする五人の日本人がいつ、どのようにして「自分」になったかを語る異色の伝記ものだった。少年少女向けに書かれた本で、きっと息子や娘に読ませるために買ったに違いない。しかし読ませることもなく、三十六歳から始めた単身赴任先に持ち出していた。

読んだのは五十歳の頃。私は山陰の教員養成学部で専門の化学を教えていた。そして、専門をどう教えるかなどより、そもそも学ぶとはどういうことかを伝えることの方がはるかに大事だ。しかしそれを伝える言葉が私にはないと情けない思いをしていた。その頃、たまたま国際基督教大学の案内パンフレットをめくっていて出会った言葉があった。「人間はどう生きて来たかを知り、自分はどう生きるかと問う」。それが学ぶことだと教えられた。

「人間はいつ自分になるか」と言う哲学者の問いかけと、「人間はどう生きて来たかを知り、自分はどう生きるかと問う」と言う大学案内の言葉に私はハッとした。私が探していたのはこんなに単純明快なことだったのかと、肩の力がドッと抜け、自分が無色透明になっていくような気がした。ハッとしたのは、実はそんなことは遠い昔の学生セツルメント活動の中で学んだのでなかったかと思ったからであった。まことに、「三千年を解くすべをもたない者は闇のなか、未熟なままにその日その日を生きる（ゲーテ）」。

振り返れば、私はいくつもの偶然に導かれて京都に居た。そしてこれも偶然だが、入学そうそう、「京都にもスラムがある」というグランドに立てられた大きな看板の前に立っていた。とつとつと、しかし延延と続く先輩セツラーの説明を聞きながら、この活動は自分には到底出来ないだろうと思った。説明を拒否する勇気はなかった。どこかで、無理をしないでどうするんだという、その後も折りに触れて自分に湧き起った無茶な思いに取りつかれていた。世の中のことも自分のことも誰にも負けないほどに知らない。

どうすれば知ることができるかも知らないという劣等感にとらわれていた人間が、突然、空を飛ぼうとしたのだ。

知らないというのは、社会であれ、自分を含めて人間であれ、対象を知らないということであり、同時に対象への思いを伝える言葉や方法を知らないということでもあった。知らないということが対象を傷つけることもあったに違いない。

セツルメント活動は社会に目を向け自分に目を向けること、社会を知り自分を知ろうとする活動であった。先の言葉を借りれば、社会を知るとは人間はどう生きて来たかを知ることであり、それは社会の今を知ることであった。自分を知るとは自分になろうとすることであり、自分はどう生きるかと未来を問うことであった。今にして思えば、偶然に導かれたセツルメント活動は、生きていくうえで何か必然的と言うべき変化を私の中にもたらした。この活動は私の学校だったのだ。

今年三月、早春の京都に五十年以上の歳月を越えて百四十名の仲間が集った。持ち寄られた無数の必然が渦を巻き、うねりとなった。奇跡のような光景だった。

偶然を必然にして人は生き
偶然を必然にして時は積む

偶然に始めた番傘川柳。それが必然となる日が、私にもきっと来るに違いない。

（かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人）

## 「哲学爺い」の時事放談（９０）

祖蔵　哲

### ２０２５年総括
### ～「すること」と「であること」の哲学

「早いもので今年も」という恒例の文句を使う時期になった。２０２５年は昭和１００年、戦後８０年という節目の年として始まったが、「新たな危機」の予感がいっそう深まる年の幕開けでもあった。歴史に物理学のような法則があるかは明らかではないが、仮説としてはいくつかの説が存在する。なかでも歴史が８０年周期で繰り返すという「８０年周期説」はもっともらしい。アメリカでは独立戦争、南北戦争、第二次世界大戦など、日本では寛政の改革（１７８０年代）から明治維新（１８６８年）、そして終戦（1945年）までがおよそ８０年の周期に当てはまり、その後も同様のサイクルで社会が変革されてきたという見方がある。

世界史的危機については、第一の危機がギリシア民主制からローマ帝国の滅亡、第二の危機が中世キリスト教世界の崩壊、第三の危機が近代資本主義の危機とされることもある。この説によれば、第三の危機は資本主義の物質文明に関わる危機であり、それはすでに終わった。そして現在、世界が直面している第四の危機は資本主義文明の精神的側面、すなわち「制度」や人間的交流、「精神」といったソフト面の危機である。「政治の混乱」「戦争」「情報操作」などはまさにこの第四の危機に属する。

こうした中で、２０２５年もまた「危機」にふさわしい出来事が相次いだ。１月には「トランプ2.0」が誕生し、「関税ディール」によって世界を混乱させた。日本でも政治の危機として「令和の米騒動」が起こった。また、物質文明に関わる「第三の危機」は、４月の連続する山火事、さらには年末の「熊騒動」として顕在化した。「戦争の危機」であるウクライナ、ガザの情勢も収束の兆しが見えないまま越年しようとしている。そのさなか、「核兵器の使用」の脅しが「抑止の理論」を越えて政治の場に姿を見せ始めた。これらを政治リーダーの資質劣化と片づけるのは簡単だが、民主主義制度においては選んだ国民にも責任がある。しかし、その判断材料となる情報すら操作されているとすれば、責任は一体誰が負うべきなのだろうか。

さて、政治リーダーといえば、「石破おろし」を経て１０月２１日に「高市初女性首相内閣」が誕生した。本性を知ってか知らずか、国民の期待はかなり大きい。その就任演説では「働いて働いて働いて働いて働いてまいります」と述べた。通常、強調のための繰り返しは三度までだが、このときは五度である。しかも「ワークライフバランス」には触れず、まる

で「馬車馬のように働け」と言わんばかりの説明であった。驚くべき時代錯誤の発言である。さらに世の中が狂ったかのように思えたのは、この言葉が今年の「流行語大賞」に選ばれたという事実だ。候補には「トランプ関税」「緊急猟銃／クマ被害」「国宝」「古古古米」「戦後８０年／昭和１００年」「ミャクミャク」「オールドメディア」などがあったらしいが、なぜこれが選ばれたのか。大賞自体に特段の権威や意味はないものの、メディアが「忖度」してこれを取り上げる事態には「不安」や「危機」すら覚える。高市氏はこのほかにも「台湾の存立危機」といった発言をしており、軽々しい言葉がどのような影響をもたらすかという「忖度」のほうは考えていないようだ。ちなみに英国のオックスフォード大学出版局は「今年の言葉」として「レイジベイト（rage bait）」を選出した。意図的に怒りを引き起こすオンライン上のコンテンツを意味するという。至極まっとうな選定である。

そこで今月は、「言葉」の定義としての「であること」と「すること」について哲学的に考えてみたい。なぜなら、高市首相は「働く」という『すること』と、「台湾有事」が日本の存立危機事態で『ある』という『であること』の両方で問題発言をしたからである。

（1）『『である』ことと『する』こと」

標題は、戦後日本を代表する政治学者・丸山真男が、安保闘争などで揺れた１９６１年に『日本の思想』で発表した、いまでも高校国語の教科書に採用される著名な評論を指す。読者の中には、懐かしく思い出される方もおられるだろう。標準的な要約を記すと、以下のようになる。

―身分社会の基盤となっていた「であること」と、近代社会の基盤となる「すること」は、制度の民主化の度合いを測る一つの基準を与える。しかし日本では、急激な近代化の過程で両者の図式に倒錯が見られるようになり、宿命的な混乱に陥った。この価値の倒錯を再転倒させるには、学問や芸術の創作活動に見られるような、深く内に蓄積された価値への確信に支えられた文化の側から、政治への発言と行動が必要である。―

丸山は、「である-する」の構図を、「権利-義務」「制度-維持」「属性-検証」「道徳-規範」といった具体的な対立概念で説明している。たとえば「民主主義」という「国民全員が政治に参加できる制度である」という『である』は、日常の「意思表示をする」「抗議する」といった『する』を伴って、初めて実質的に機能する。

さらに丸山は、徳川時代の身分制度では「武士である」ことが、「武士らしくする」こと、すなわち行為面のモラルと結びついていた点を指摘する。これは「女は女らしく」といった自然主義的誤謬にもつながる哲学的問題でもある。

要するに丸山は、日本では近代以降の『である』（制度）を、前近代の“身分”と同じように捉え、「改革する」「行動する」といった『する』と結びつけて考える発想が欠けていたと論じている。近代の「民主主義制度」は“改革する”という行為と一体となって初めて生命をもつ。これは現代にもそのまま当てはまる指摘である。

（2）知識と行為

知識（である）と行為（する）の哲学的関係は、今日に至るまで続く重要なテーマである。「知識」（知っていること）が「行為」（できること）につながるかどうかは、「理論知識」と「実践知識」の接続の問題として論じられてきた。「自転車の仕組みを知っている」（命題的知識）ことが、「自転車に乗れる」（技能的知識）ことに直結するとは限らない。しかし逆は可能で、仕組みを知らなくても自転車に乗れる人は多い。

ただし重要なのは、「する」ことができなくなったとき，すなわち非常時や危機的状況では「命題的知識」がなければ目的が達成できないことがある点だ。自転車が故障すれば、修理方法を知らない限り再び乗ることはできない。

さらに「知識」が「行為」へとつながるためには、「意図」と「理由付け」も必要になる。「意図」とは何をしようとしているのかであり、「行為」には目的と計画が内包される。また「動機・理由」には、その行為を行うべきかどうかという価値判断が含まれる。つまり、「正しいやり方を知っている」だけでは人は行動しない。行為とは、知識＋意図＋理由という複合的プロセスによって成立するのである。

アリストテレスは、エピステーメー（理論的知）、フロネーシス（実践的知恵）、テクネ（技術的知）を区別した。なかでも「善く生きるための行為」には単なる理論知ではなく、状況に応じて判断するフロネーシス（実践的知恵）が不可欠だとする。知識はこの実践的知恵と結びついて初めて「良い行為」へと転換される。

日本文化では、「知識」と「実践」が一体的であるという価値観が比較的強い。「分かったら行動する」ではなく、「行為する中で分かっていく」という発想であり、茶道・武道に見られる「守・破・離」や「身体知」、「習うより慣れろ」といった感覚がこれを支えている。ここでは、知識は頭だけでなく身体的・実践的過程の中で形成されると理解される。この点は西洋哲学との対比でも興味深い。

現代の分析哲学では、知識が行為の根拠としてどのように機能するか、また知識がなければ合理的行動は可能なのかが議論されている。ある立場では、「知識」が正しい行動を導く理由となりうるとされる。他方、行為を決定するのは「信念」や「欲求」であり、知識は必須ではない

と論じる立場もある。たとえば地図を知らなくても、「駅に行きたい」という欲求があれば行動は始まる。ただし、その行動が合理的かどうかは知識の有無で大きく左右される。

要するに、知識は行為の必要条件にはなるが、十分条件にはならない。行為には、知識に加えて 意図・理由・技能・実践的知恵 が必要である。日本的な視点からは、知識と行為はむしろ「相互に育て合う」関係として理解されやすい。

（3）高市首相の「する」と「である」

高市首相の「働け」発言は、『する』の論理に属する。首相はその際、「働く」とは何かという『である』の説明を行わなかった。否、むしろ「ワークライフバランスを無視することだ」という趣旨の説明をしたが、実際には両者を区別して考えていないように見える。私的見解であるという逃げ口上は、公的な場での発言としては許されない。あの発言は、やはり首相本人の確信を反映したものと考えるべきだろう。

一方、「台湾有事」発言は「である」の論理である。首相は国会答弁で「台湾有事は日本の存立危機である」と述べた。台湾が中国に侵攻された場合、日本が集団的自衛権を行使しうる事態になる、すなわち台湾有事とは日本が参戦「する」ことにつながる、という意味を軽々しく述べたことになる。こうした明言は、アメリカですら慎重に避けている。米国は中国と台湾の関係を「あいまい戦略」と呼ばれる政治手法で扱ってきた。日本の集団的自衛権は米国との結びつきを前提とするため、あのトランプでさえ高市首相に警告したのである。

このように高市首相は、「である-する」の思考において、しばしば『する』を直観的に優先してしまうように見える。そのため、軽率で不用意な発言が生じるのだろう。しかし、その根底には『である』の側の潜在的前提が存在すると考えざるをえない。「日本国民は御国のために働く国民である」、「台湾は依然として日本の延長領域である」といった“定義”が無意識に働いているように見えるのである。

（4）「する-である」倒錯の再転倒

丸山真男が指摘したように、日本では急速な西欧近代化の過程で、『である』より『する』の価値が重視されるようになった。結果よりも過程、とにかく「働く」ことが価値となった高度成長期はその典型である。うまくいっている時代はそれでも構わなかったが、現在は大きく状況が変化している。

丸山はこの価値の倒錯を「再転倒」させる必要を説いた。すなわち、再び『である』を深く考えるということである。「戦え」「働け」といった『する』が生み出した「結果」＝『である』を深く考察し、反省することで、新たな『する』の課題が提出される。この循環によって歴史は方向を修正しながら進んでいくべきだ。大きく振れながらその反動で進むのではなく、螺旋的に進むことこそが歴史の進歩である。

そのためには、「である-する」の直観的・無意識的な一致ではなく、文化的・政治的に自覚された歴史意識を日常に根づかせることが求められる。

最後に、これも恒例文の挨拶となる。「よいお年をお迎えください」。辛辣で老いの「爺い」が言うと少し不安を誘うかもしれないが、今年も粘り強く読んでいただいたことに感謝しつつ、ここで締めくくりたい。

## ボケ老人の雑記（その２１）

明石　幸次郎

### 「３５年ぶりの再会」

先日、実家の墓参りと、１３年前に癌で亡くなったた高校時代からの親友Ｋ君の墓参りに行きました。実家の墓参りを終えた後、Ｋ君の奥さんが待ち合わせの場所まで車で迎えに来てくれました。助手席に乗り込むと、直ぐに車は走り出しました。

シートベルトを装着した途端に奥さんが「明石さん、お墓参りにわざわざ来てもらって本当にありがとうございます。お参りが終わったら“あのＮさん”に連絡してますので、Ｎさんがやってる保育園に行きましょう！４時に行くと言ってますので。Ｎさんも明石さんを連れてくると言ったら驚いてました」と予想外のスケジュールに少し戸惑いました。

「へー、そりゃまた、急にＮ君もさぞかしビックリしてたんじゃないですか？お宅でＮ君と会ったのは、確か私の娘が小５、６年位で、お宅のＥちゃんが一つ下の小４，５年やったかなぁ？もう３０年以上前ですよ。顔を見てもお互い分からないと思いますよ。しかし、なぜ彼が保育園をやりだしたんですか？面白いね」

「それは、Ｎさんのお兄さんがやってる会社の従業員が、保育園が足らないので困っているということで、それなら、“企業内保育園”を作ろうということになり、塾の先生を辞めてから、兄さんの会社の顧問をしていたＮさんに保育園の理事長をやって欲しいと言われ、それで、園の責任者としてやられているようです」

「へえー。この明石は前の市長の泉さんの『子育て支援策』お陰で若い人が増えて、保育園が足りないみたいですね？」

「そうなんですよ！ここら辺わね。私はボランティアで元保育士仲間とお茶を

たてて、子供たちに茶道の実体験をして貰おうと企画して、そのパンフレットを持って、あちこちの保育園を回っていて、その中で偶々、尋ねた保育園にあのNさんがいたんですよ。お互い久しぶりの再会で、本当にビックリしました。それ時に、驚いたNさんと私の二人の写真をラインで明石さんの奥さんに送ったんですよ」

「ああ、見ましたよ。全然N君とは分かりませんでした。しかし、Nがなんで保育園をやっている経緯も分かりませんでした。それでそのお茶会、ティパーティはどうでした？」

「それは、もう園児たちがみんな喜んでくれて、楽しかったですよー。その時に、着て行った着物が明石さんから貰ったお母さんの水色の着物でした。Nさんから園児たちが貴重な面白い体験をして喜んでいたので又、機会があればやって欲しいと言われました。しかし、一番喜んでいたのが私と元保育士の仲間たちですかねーはっはっはーーー」

「それは楽しいボランティアですね。私がやっているボランティアと大違いで、元気が貰えるボランティアですね」

「そうですねん。本当に私たちの元保育士のおばあちゃん達が生きがいを感じて喜んでいるんですよ。保育園に行かせてもらい、元気な園児達の笑顔が見れるわね～と」

「そうですね。何か元保育士さんの活躍できる“場”が出来て、しかも、子供の喜ぶ笑顔見られるのわ！いいですね。老人ホームのボランティア活動とは、又、違うね」

「そうですねん。有難いわ！それにしても、何十年も前はNさん、ピリピリしていて、痩せた塾の先生というよりは、夫と一緒にスナックに行ってた頃の顔は“痩せた売れない貧乏絵描き”のようでした。

１０時頃になったら、一人で寂しく店に入って来られてね。それで、カウンターに座り、ウイスキーの水割りを二、三杯飲んで、煙草を何本も吸いながら。カラオケは加藤登紀子の“百万本の赤いバラ”と河島英五の“酒と泪と男と女”と“時代おくれ”などを唄って、１２時前になったらそっと帰っておられましたね。あの頃は本名は知らずに皆が、『百万本の赤いバラ』さんと呼んでました」

「売れない貧乏人の絵描きか？上手いこと言うね。それと河島英五の『時代遅れ』か、あいつらしい歌やなぁ」

「そのNさんが出会った頃と比べたら、本当に今はすっかり園の理事長と言うよりは、おじいちゃん園長先生ですよ。明石さんが来られたら、さぞかし驚かれますよ」

それで、35年前、亡きK君宅でのN君との驚きの再会を思い出しました。

そのN君とは大学を卒業して入社した大手製造会社の１８０人位の同期の一人で、偶々、高校が同じで、N君は旧帝大の教育学部行くために長く勉強して、私より一学年上で、高校時代のN君とは面識はありませんでした。

入社時から、同期の皆からは、Nは中々、優秀で賢いと一目おかれてました。私は一年上の先輩だと思い、N君にアホなことを言えないし、かといって同郷のしかも同じ高校である親近感を抱きながら複雑な気持ちを抱えて、何とはなしに一歩距離をおいていました。

各工場での４か月にわたる現場実習期間が終了して、同期の理科系１００名と文科系８０名程が午前と午後に分けて本社の講堂に集められて、人事部長のK部長から正式に配属辞令が渡されました。

N君は人事本部の中で社長肝いりの新設の「教育部」配属という辞令が交付されました。その部署は1万2千人ほどの社員を教育する部門だけに人事、労務のエリート社員を集めていました。新入社員で一人だけ配属されるのは、実習の時の素行、態度が良かったか、入社試験か大学の成績が良かったのからだと言われてました。

私は同じ大阪本社の平凡な社員らしい？資材部に配属され、それ以来「B級サラリーマン」渡世譚を送りました。

N君は配属された教育部で全国の支店、営業所、工場、販社などを回り、従業員の教育に勤め、その間に、同じ部門の才媛で美人でバリバリ仕事をこなすTさんと結婚して、８年後に枚方の工場の勤労課に転勤したようで、そこで、何かのトラブルで上司を殴り、元阪神タイガースの江本のように「ベンチがアホやから！」ではなく「上司があほやから」で会社を辞めてしまったと周りのうわさで知りました。

私はその時は、海外輸出部にいて、海外を飛び回っていたので、N君のことは、何か筋を通して辞めて、どこかの会社で、教育部で経験したことを生かしてやってるんだと思っていました。

ある時、私と仲が良かった教育部にいた2年先輩が、「N君が明石の大久保で塾を開いて１００人位の中、高校生を集めて教えて、頑張ってるで。この前、見に行って来たんや」と連絡してくれました。そうか、さすがやなあ、１００人の生徒をひとりで教えてるのか？　すごいなあ程度にしか思っていませんでした。

子供が小さい頃は毎年、正月、お盆には明石に帰省して、実家とK君宅を行き来していました。

ある時にK君の奥さんの車で買い物をした帰りにふと「明石さん、定年になったら、何するの？　老後は長いですよ。主人は、死ぬまで自分の設計事務所で働くつもりですけど？」

「まだ３０代やから考えたことはないけど、塾の先生くらいは出来るかも知れんけど」

「いや、塾の先生は大変ですよ。まあ、

警備員やったら出来るよ！」
「そうか、警備員か？　もう少し、知的な仕事はないかなあ？　ところで、この辺で会社を辞めた同期が塾を開いでる話を会社で聞いたことがあるんや？」
と会話して、買い物を済ませK君宅に戻り、K君と私の家内を交え雑談していたら、K君の奥さんが「塾で思い出したが、明石さんその人の名前なんていうの？」
「ああ、N君で色白で顔が細く、すらっとした体型やと記憶がある。会社をいきなり辞めてしまった奴やねん」
「ええ、体型からしたら、アンタ、その人、あの百万本の赤いバラさんと違う？　きっとそうや、この前電話番号聞いてたから、電話しよう！」とK君に向かって言ったので「おいおい、違う人やったらどうするんや」とK君は引き留めました。
これと思えば突き進む奥さんは、メモに書いた電話番号をダイヤルを回して「もしもし、あの百万本の赤いバラさんのお宅ですか？　そうですね。貴方、本名はNさんでしょう？　うちに明石さんと言う人が主人の友達でおられるので代わりますね！　同じ会社やったんやね」
やっぱり、赤いバラさんはNさんでしたと、受話器を抑えて私と代わりました。
「もしもし、明石です。覚えてくれてる同期の明石や」
「なんで、お前、Kさんのうちにいるんや？びっくりしたわ」
「K君とは高校からの親友でよく遊びに来てるんや」「何で俺のことが分かったんや」
「先輩のOさんから、君が大久保で塾を経営して、頑張ってると聞いていたから、ふとK君の奥さんに雑談で聞いたら、直観で君に間違いないと電話をされたんや！」
「へー、あの奥さん面白い人やなあ」と言って、又、奥さんに電話を代わり
「Nさん、家の住所分かる？　明石さん家族もいるので、すぐに遊びに来て！　あそー、夜の１０時にならないと塾から離れられない。そう、スナックに来る時間やね。それでは、１０時に来てね、お待ちしてますね」
という電話での会話があり、１０時を回ってから、Nくんが一人でK君宅を訪ねて来たので、その時はN君が会社を辞めてから数年が経った時でしたので、新入社員時代の面影は残していました。
今回はそれ以来の「百万本の赤いバラ」N君との再会です。

## オクラの山たより（１１１）

困了生

### 一

久佐賀義孝と樋口一葉との交渉が始まった頃、樋口家の家計は窮迫の域を超えつつありました。正月を過ぎたころに通りの向かいに「野沢」という同業の店が開くとそちらにお客を取られようになったからです。多少の品物が売れたにしてもそのほとんどは子供相手の駄菓子とあっては労多くして益は少ない毎日が続きました。一葉の目論見としては早朝に一葉が仕入れに出かけ、日中の店番は妹の邦子に任せて、その間、奥の間で机に向かって小説を執筆するはずであったが、実のところ疲労と頭痛で一日寝込んでしまうことが多くありました。一葉が龍泉寺に転居してから三年後に結核で亡くなっていることを考えると亡兄の泉太郎からもらった結核が疲労や貧困による栄養不足によって確実に進行していたかもしれません。
借金ができるところもそろそろ限界となっており、一葉は追い詰められつつありました。久佐賀義孝のところに足を運んだのもこんな時期でした。
三月になると一葉は店をたたむことを決意します。母親のたきと妹の邦子もこのまったく利益の出ない商売がすっかり嫌になっていました。一九八四（明治二十七）年三月の「塵中につ記」に次の記述があります。
邦子はものに耐え忍ぶの気象とぼし。この分厘にいたく飽きたるころとて、前後の慮りなく「止めにせばや」とひたすらすすむ。母君も、「かく塵の中にうごめき居らんよりは、小さしといへども門構えの家に入り、柔らかき衣類にて重ねまほしき」が願ひなり。されば、我がもとの心は知るや知らずや、両人ともすすむること切なり。
「分厘」とは「わずかこと」で、ここでは「細々とした商売」のことです。一葉が商品の仕入れのために重い荷物を背負ってあちこちを歩き回っている間、終日、さしてもうからぬ子供相手の商売に店番担当の邦子が音を上げ、母親のたきも龍泉寺のゴミ溜めのようなところに住むよりもちゃんとした士族の家で暖かい着物を着て暮らしたいと戸主の一葉にしきりと訴えるようになっていたのです。私の苦労を理解しているのかどうか、本当に腹立たしいと言いたげな一葉の書きぶりです。
余談ですが、一葉の日記に登場する人物で一葉から厳しい批判を受けなかった人物は一人もいません。その中で例外といってもいいのは、そもそも言及が非常に少なく早逝した長兄の泉太郎、常に自分の味方だった父親、そして邦子の三人

です。

よく議論になるのは日記に最も多く登場する邦子がこの日の記述以外に批判の対象にならなかったのかです。これにはいろいろな説が出されています。たとえば、長らく日記を保管していた邦子が不都合な部分は邦子が処分したという見方。いや、一緒に狭い家で暮らしているためにいつ盗み見されるか分からないため一葉が描くのを避けたという見方、などなどです。しかし、どちらの説も邦子への批判的な言葉がここだけ残ったのかという説明にはなりません。さらに言えば姉の筆になるものは反故一枚に至るまで大切に保存していた邦子であり、そもそも一葉が日記は焼き捨ててくれと遺言していたのに、その言葉だけは守らず、焼き捨てるどころか出版ために奔走した邦子です。となると日記中に一カ所だけ見える妹へのこの批判的な言葉は、むしろ邦子が姉一葉の日記をあれこれと操作することなくそのままの形で伝えてきたことの証左であるといえます。

総じて一葉は妹の邦子には同情的でした。自分は萩の舎にも入れてもらい、多少の贅沢も経験したのに対して幼いころから苦労し通しの妹です。姉として暖かい視線を注がずにはいられなかったのでしょう。ですが、この時ばかりは腹に据えかねた、ということがここから分かります。去年の八月に開店して、わずか七カ月で店を閉じるにしても、それには大金が必要でした。それを一体どうするのか。しかも家にあったこれはという物はすでに「売りつくし」、借金をしようにも「借りつくし」た今となっては「どこより一銭の入金もあるまじき」状態でした。それなのに妹は「こんな商売、早くやめようよ、姉さん」とせかす一方であり、母親のたきに至っては「士族にふさわしい門構えのある家で柔らかい衣服を重ね着したいわね」などと能天気なことを言うばかりです。二人とも自分の思いを少しも分かってくれない、と一葉は日記に書かずにはいられなかったのでしょう。

店を閉じ転居をすると一葉が決意したのは三月二十四日のこと。決意したならば多少せっかちなところもある一葉の動きは速く、父の生存中には懇意であった石川銀次郎、西村釧之助から都合六十五円（今の百三十万円ほど）を借りて、五月一日に一葉にとって終の住みかとなった本郷丸山福山町に転居しました。定収入としての見込みは三月二十七日に萩の舎の中島歌子から月手当を二円出すから萩の舎の代稽古をしてほしいといわれ始めた萩の舎の助教の仕事です。もちろん、それだけの額では生活の足しになるわけもなく、三度目の本郷の暮らしはいささか不安な船出でした。

なお、樋口家の人たちが龍泉寺を引き上げる時に近所の人たちに根岸に転宅すると吹聴したという話が伝わっています。根岸とは当時まだ文人墨客が多く住む閑雅な家が立ち並ぶ高級住宅地でした。「あの根岸に住みますのよ」と近所に触れまわったのは「門構えの家に住みたい」と願っていた母たきかもしれません。士族の誇りが忘れられないたきの見栄っ張りぶりがうかがわれます。

## 二

新しい住所は本郷区丸山福山町四。奇しくもかつて祖父の八左衛門が駕籠訴をした相手である阿部正弘の屋敷のあった高台の下にあり、「守喜」という鰻料理屋の離れ座敷でさほど古くもない一戸建ての家でした。棟割り長屋ではなかったので家賃は月三円であり、龍泉寺の家のそれが一円八十銭だったことからするとずいぶんと高くなりました。

樋口家の新たな住まいは、裏手の阿部邸の崖から染み出してくる水がたまってできていた半径五メートルほどの円形の小さな池の隣に立っている家でした。江戸時代にはこの辺り一帯は水田だったのですが、明治になって埋め立てられて新開地となった場所でした。そのため一見一杯飲み屋に見せつつ実は売春宿となっていた銘酒屋が多く並んでいる場所であり、一種の花街ともいえる土地に樋口一家は住んだことになります。家は銘酒屋の裏と隣り合わせになっているため、女たちが客を揚げて遊ばせる様子が手に取るように分かる場所でした。樋口家の人々がどこまで意識したかは不明ですが、樋口家は吉原という公娼街から私娼窟といってよい銘酒屋街に越してきたということになります。その家の近辺のようすを一葉は「しのぶぐさ」に次のように書いています。

となりに酒売る店あり。女子あまた居て、客の伽（とぎ）をする事うたひめのごとく、遊女（あそび）に似たり。常に文書きて給はれとて我がもとに持て来る。主（ぬし）はいつも変はりて、その数はかりがたし。

このようなところは女三人が暮らすのによい場所ともいえず、萩の舎にも近く助教となった一葉に悪い噂が立てられかねない場所でした。

そうした環境にありましたが、家の裏にある小さな池は一葉のお気に入りだったようで、この池は彼女が自らの日記の題名を「水の上」と名付けた由来となった池であり、一葉は一日に何度もこの池の面を見つめつつ、いくつもの作品を書いていました。随筆「月の夜」にその心境を求めることができます。

ささやかなる庭の池水にゆられて見ゆる影、物いふやうにて、手すりめいたるところに寄りて久しう見入るれば、はじめは浮きたるやうなりしも次第に底深く、この池の深さい

くばくとも量られぬ心地になりて、月はその底の底のいと深くに住むらん物のやうに思はれぬ。久しうありて仰ぎ見るに、空なる月と水の影といづれを誠のかたちとも思はれず。物ぐるほしけれど箱庭に作りたる石一つ水の面にそと落とせば、さざ波すこし分かれて、これにぞ月の影漂ひぬ。

水の面、水の上に映る月。空にかかる月と水面の月の姿とどちらが本当の月なのか、それを思うと物狂おしくなって石を投げると水面の月はさざ波にその姿をかき消してしまいます。この「はかなさ」の表現は晩年に書き留められた下書きにある「身はもと江湖の一扁舟みずから一葉と名乗って芦の葉のあやふきを知る」と共通するものが見られます。揺らめく水面、波に消える月の姿、水の流れに頼りなげに漂う一枚の葉。それは一葉がとらえた自己の姿だったかもしれません。

しかし、この厳しい自画像に一葉は埋没することはありませんでした。樋口家を支える戸主としての奮闘の体験、萩の舎における貧富の差からくる屈辱の体験、恋い慕う半井桃水との別れ、自分との婚約を一方的に破棄した渋谷三郎、「妾になれ」と言ってきた久佐賀義孝。こうした数々の体験は一葉の内面を大きく成長させました。「我はもとより浮き世に捨て物の一身」にほかならない、はかない存在である自己の「生」のありようを厳しく見つめ、そこを始点として周りの世界を見ることを始めたのです。それは創作活動の面では初期の作品にあるロマネスク（夢幻的、幻想的）な世界からの離脱となって現れました。こうした思いを黒々とわだかまらせていた一葉は本郷丸山福山町の家で最初に書いた作品で彼女の内面を物語の世界を解き放していきます。その作品が「やみ夜」です。「やみ夜」はそうした点で重要な作品といえます。

## 三

いま述べたように「やみ夜」は一葉にとって日常的な世界に生まれ出る鬱屈した思いを王朝風の夢幻的・幻想的な物語の世界で吐き出し解消していくという処女作「闇桜」以来の小説の書き方にはもはや納得できなくなった作家一葉の転機となった作品です。

まずはその梗概にふれておきましょう。

「源氏物語」の「夕顔」に描かれた河原院を思わせる荒廃した「松川屋敷」には、二十五歳の謎に満ちた美女お蘭が使用人の佐助夫婦と世間との交流を断って住んでいる。ある夜、お蘭は屋敷の門前で衆議院議員波崎漂（なみざきただよう）の車にはねられた高木直次郎を助けます。直次郎は両親をなくした孤児で志を失い世間を恨みをもって漂泊する身でした。直次郎は次第に年上のお蘭の魅力にとらわれていきます。その直次郎にお蘭は波崎の命を奪ってくれとかきくどきます。実は、波崎はお蘭の父親が投機に失敗して詐欺師の汚名をまま自宅の池に投身自殺をした際に、外聞をはばかってお蘭を捨てた男だったのです。お蘭の本性が「外面菩薩内面夜叉」であると気づきながらも、直次郎は波崎を殺すために「松川屋敷」を出ていきます。数日後、波崎は暴漢に襲われますが、軽傷を負っただけでその権勢は衰えることはありませんでした。その後、直次郎の行方はわからず、「松川屋敷」も人手に渡ってお蘭たちもいずことなく姿を消しました。

この大雑把な内容紹介を読んだだけでもそれまでの職人気質を描いた「うもれ木」を除いて悲劇に終わる男女の恋愛物語を王朝文学風に多く書いてきた一葉のそれまでの作品群とはかなり違った内容もっているということがわかると思います。

この作品のキーワードは題名にもなっている「闇」です。なかでも最も深く大きな闇は「松川屋敷」です。この廃邸といってもよい屋敷は外部から隔離された空間であり、年老いた召使夫婦にかしずかれて日陰の身をひそませている一人の美女がお蘭です。おどろおどろしい「松川屋敷」にたちこめる不気味な雰囲気がひときわ濃縮されて淀んでいるところはお蘭の父親が投身自殺をした「池」です。それは「幾かかえの松が枝、大蛇の水に臨める如くうねりて、下枝は濡るる古池の深さ幾ばくぞ」という池であり、「入日かげろふ夕暮れなどは独り立つまじき怪の心さへ呼びおこす」という池でした。この池が象徴する世界は「鬼」さえ現れそうな世界であり、それが「松川屋敷」なのでした。この世界は明るい文明開化への強烈なパラドックスであり、「才子の君、利口の君万々歳」の世である明治の社会全体への暗鬱たるアンチテーゼのような世界です。

この闇の世界の女あるじであるお蘭は「狂はば一世を暗にして」とうそぶいている虚無的で反逆的な精神を持っており、「官臭とやら女子の知らぬ香のする党」に所属して世俗的な成功を約束された代議士、しかも自分を裏切った波崎への怨恨をつのらせているという心の闇を持っています。

また、直次郎もその身の回りには死がまつわりついていました。不幸にして夭死した父。「妻とは言はえぬ身」であったために父の親族に追い出され直次郎を産むと同時に死んだ母。周囲の偏見の中で直次郎を育て、人が聞けばたまげるような言葉を残し不起の病で無残な死を迎えた祖父。彼は「母と祖父との」恨みを背負って生きてきました。この心に持つ闇のせいか何をしてもうまくいかない直

次郎なのでした。

「松川屋敷」の門前でたまたま波崎の車にはねられた直次郎は「松川屋敷」の中に引き入れられますが、お蘭はまず彼を無条件に抱き取る存在となります。母の死と引き換えに生を受けた直次郎にはお蘭を「女菩薩」とも思えて、彼は「松川屋敷」の中という閉ざされた空間で疑似的な母子関係へと引きずり込まれていきます。

そして、閉ざされた空間での強い縛りにあるということではお蘭も同様であり、それは彼女と今は亡き父との関係です。直次郎と同じく幼くして母を失い父親との間に強いつながりの思いを持っていたお蘭は死の世界にいる父親によって現在も呪縛といってよい状態になっています。

直次郎とお蘭との疑似的な母子関係。お蘭とその亡き父との関係。この二つの閉じられた関係が「松川屋敷」という底知れぬ「闇」の中で醸成されていたのです。

四

「やみ夜」の物語はまだ傷のいえぬ直次郎が夢うつつに聞いた「女菩薩」つまりお蘭の「汝は我と離るべきものならず、我れは汝と離るべき中ならず」という言葉通り直次郎はお蘭の行動する身体となって「松川屋敷」から門の外へとはなたれます。しかし、「松川屋敷」の「闇」の空間の中で醸成されたお蘭の怨恨を彼女に代わってはらすはずであった直次郎は波崎に「薄手の傷」を負わせただけでいずこともなく姿を消します。物語の終わりは語り手によって唐突に「汽車は国中に通ずる頃なれば」との近代文明の象徴が示され、それまで語られてきた「闇」は一瞬に消えてなくなります。「松川屋敷」は修理されて面目を一新し「佐助夫婦もお蘭も何処に行」ったのかわからずじまい。「松川屋敷」はまさに迷夢のように突如として読者の前から消えてしまいます。これはどういうことか、謎です。

謎といえばお蘭が「我ながら女夜叉の本性」と語る「女夜叉」という自己認識と「女菩薩」のようにふるまうという身体とのズレです。表面上は優しく慇懃にふるまってはいても心の中では意地悪く笑って復讐のチャンスを待つというのがお蘭の作戦であっても、それは現実には何の意味も持ちません。「女夜叉」の「怨恨」がどれほど深くなろうとも彼女がそれを口に出さない限り他者に伝わることはありませんから。意地悪く見れば行動する身体としての直次郎を得るためにお蘭は直次郎への「恋」までも口にしますが、すでにお蘭と疑似的母子関係に身を任せていた直次郎がお蘭の「怨恨」を晴らすべく行動へと移るのは容易なことでした。お蘭の身体となって「松川屋敷」を出た直次郎は波崎暗殺に失敗します。つまり、「闇」によって閉ざされた空間の世界で醸成されてきたお蘭の「怨恨」は、「闇」の外の世界では何の力も発揮できなかったのです。閉ざされた世界、閉ざされた関係性の限界であったといえます。

この「やみ夜」を発表した直後に一葉は「大つごもり」を発表します。この「大つごもり」では白日の日常の場、それも社会の底辺でひたすら労働に励む一人の若い女性お峰の、生身の女性の生きざまが語られています。それは「やみ夜」の閉ざされた暗鬱な空間からの脱却であったことを意味しています。いな、むしろこの「やみ夜」の暗い世界を経たからこそ「大つごもり」の語り手の登場が可能であったといえるかもしれません。一葉にとって「やみ夜」から「大つごもり」へと移っていく創作の過程は文字通りの転換点なのでした。

「恐ろしきは涙の後の女子心（おんなごころ）なり」は「やみ夜」の中でお蘭が自分の本性は「女夜叉」だとつぶやいたことへの語り手の言葉です。この言葉を胸に一葉は社会の様々な場で生きている女性の姿をリアルに描いていきます。「大つごもり」のお峰、「たけくらべ」の美登利、「にごりえ」のお力、「十三夜」のお関、いずれもそうです。以後、これらの作品を追いつつ樋口家を取りまく状況を見ていこうと思います。

# 隠された歴史（８６）

満田　正賢

今回は、日本書紀の中で、従来あまり注目されていなかった戦いの話をします。それは、いわゆる「丁未の乱」＝「蘇我物部戦争」の話ではありますが、物部守屋が渋川の館で蘇我馬子や厩戸皇子達によって殺された後に続く物語です。

実は、古田史学の会の冨川ケイ子氏が『河内戦争―心の自由を求める戦士と名前のないミカドが歴史を変えた』「古代に真実を求めて（古田史学論集第十八集）」という論文で考察した内容を、私が批判する中で明らかになったことです。まず、冨川論文が問題にした日本書紀崇峻紀の記述を原文でご紹介します。

物部守屋大連資人、捕鳥部萬　萬、名也　將一百人守難波宅、而聞大連滅、騎馬夜逃、向茅渟縣有眞香邑、仍過婦宅而遂匿山。朝庭議曰「萬、懷逆心、故隱此山中。早須滅族、可不怠歟。」萬、衣裳幣垢、形色憔悴、持弓帶劒、獨自出來。有司、遣數百衞士圍萬。萬、卽驚匿篁藂、以繩繫竹引動、令他惑己所入。衞士等、被詐、指搖竹馳言、萬在此。萬、卽發箭、一無不中。衞士等、恐不敢近。萬、便弛弓挾腋、向山走去。衞士等、卽夾河追射、皆不能中。

於是、有一衞士、疾馳、先萬而伏河側、擬射、中膝。萬、卽拔箭、張弓發箭、伏地而號曰「萬、爲天皇之楯、將效其勇、

而不推問。翻致逼迫於此窮矣。可共語者來、願聞殺虜之際。」衞士等、競馳射萬。萬、便拂捍飛矢、殺三十餘人、仍以持劒三截其弓、還屈其劒、投河水裏、別以刀子刺頸死焉。河內國司、以萬死狀、牒上朝庭。朝庭下符稱「斬之八段、散梟八國。」河內國司、卽依符旨、臨斬梟時、雷鳴大雨。

爰有萬養白犬、俯仰廻吠於其屍側、遂嚙舉頭收置古冢、横臥枕側、飢死於前。河內國司、尤異其犬、牒上朝庭。朝庭哀不忍聽、下符稱曰「此犬、世所希聞、可觀於後。須使萬族作墓而葬。」由是、萬族、雙起墓於有眞香邑葬萬與犬焉。河內國言「於餌香川原有被斬人、計將數百。頭身既爛、姓宇難知、但以衣色收取其身者。爰有櫻井田部連膽渟所養之犬、嚙續身頭伏側固守、使收己主乃起行之。」

日本書紀崇峻紀に描かれた蘇我・物部戦争の前半の部分は物部守屋の渋河の館（東大阪市）の包囲戦です。そして後半の部分は、茅渟縣（ちぬのあがた）の有真香邑（ありまかむら）（貝塚市）の山中に逃げ込んだ捕鳥部萬（ととりべのよろず）の包囲戦の描写と「餌香（えが）の河原（藤井寺）に数百の斬られた人がある」という別の場所の描写です。いずれも河内国内の戦いの描写であり、冨川氏が後半部分に描かれた戦いを「河内戦争」と名づけたのはまさに正鵠を得ています。

しかし冨川氏はこの記事についてもっと突っ込んだ考察をしました。それは次のようなものです。

第一に、この後半の記事は、評制・郡制期よりも前に成立したものと推測される。

第二に、前半では見かけない令制用語が後半では頻繁に使われ、「朝廷(みかど)」を頂点とした令制的な秩序や文書行政の様子が描写されている。

第三に、その「朝廷」の該当者は近畿天皇家には見当たらない。九州王朝の天子(多利思北弧かもしれない)であろう。

第四に、一王全民型の絶対服従圧力に対抗して、個人の自主性に基づく主従契約モデルが提示されている。・・・・

第五に、「河内戦争」の結果、河内を中心とする「八つの国」が「朝廷」の支配下に入った。・・・・

第六に、「朝廷」による近畿平定は日本史上における一大事業だったと言って過言ではない。近畿はその後数十年をかけた開発により、前期難波宮、天王寺などの建造をはじめとして評制の施行という全国的な新政策の発信地になるなど、大発展を遂げた。・・・・

この冨川氏の考察への批判をもとに、「河内戦争」の真相を明らかにしていきます。

冨川氏は、「散梟(ちらせさらせ)八國」という記述から、捕鳥部萬が近畿八カ国を支配していた、「河内戦争」は九州王朝が近畿八国の支配者を滅ぼした戦闘の記事を蘇我物部戦争の記事に潜り込ませた、と推測しているのですが、けして戦いは近畿八カ国には広がっていません。「斬之八段、散梟八國。(八段に斬りて八つの國に散らせ梟せ)」という言葉は「八つ裂きの刑」を表した言葉であると推測できます。「八つ裂きの刑」という表現は中国その他にない表現であり、日本独特のもので、その語源もはっきりしていませんが、「八段に斬る」という表現自体が「八つ裂きの刑」の語源である可能性すらあると思います。「八段に斬る」の「八」は多くの数、すなわち何度も何度もずたずたに斬るという表現で、「大八洲」「八百萬神」「八重雲」「八咫鏡」「八岐大蛇」など、「八」を用いた多くの用例があります。なお、古事記では「八十健(やそたける)」と記された人物は日本書紀では「八十梟師(やそたける)」と記されています。この人物名に使われた「梟」という文字が「八つの國に散らせ梟（さら）せ」という表現に使われていることは暗示的です。

それでは、「河内戦争」の真相とはどのようなものだったのでしょうか。日本書紀の記述では、蘇我物部戦争は、厩戸皇子（聖徳太子）が四天王に誓願してようやく勝利した一大決戦のように記されていますが、前半の実際の描写は物部守屋の居る渋河の館の包囲戦です。二〇二二年から続くロシアのウクライナ侵攻において、ロシア軍は当初ウクライナの首都キーウの攻略の為に進撃しました。最初に指示系統の中枢を攻略すれば、その後の戦いが容易になるのは戦争における常識です。蘇我連合軍は物部守屋の本拠地を急襲して守屋を殺し、指示系統中枢の攻略に成功しました。あとは指示系統を失った残党の掃討戦です。

私は「隠された歴史（15）」で、榊原史子氏の『四天王寺縁起の研究』などによって物部守屋の支配地が当時の四天王寺その他の領地となっていることを検証し、「物部氏は饒速日（にぎはやひ）の子孫とされる近畿王朝内の有力豪族であり、物部総領家は麁鹿火(あらかい)・尾輿(おこし)・守屋（もりや）と継続して大連の地位を得ています。物部守屋の所領は日本書紀で誇大に描かれているとは考えられず、むしろ敗者の常として最小限の記述がなされていると考えるべきです。日本書紀に記載された、捕鳥部万（ととりべのよろず）が守っていた難波の館も渋川の地と別に実際に存在していたと思われます。」と考察しました。そして、「難波の館の跡地に蘇我氏が天王寺（初期四天王寺）を建設し、乙巳の変の後で、蘇我氏を滅ぼした九州王朝が四天王寺を移設して跡地に前期難波宮を建設した」と考察しました。

蘇我連合軍が志紀郡から渋河に向かっていることから、蘇我連合軍は大和から信貴山を越えて河内に攻め入ったことは間違いないと思われます。当時の近畿の豪族の支配地域として蘇我氏の勢力の中心が大和にあったのに対して、物部氏の

勢力が河内一帯に及んでいたとみて間違いがないのではないでしょうか。

冨川氏は蘇我物部戦争の後半部分には二つの異なる忠犬譚があることを明らかにしました。その二つの忠犬譚に記された戦いの描写とは、茅渟縣（ちぬのあがた）有真香邑（ありまかむら）（貝塚市）の山中に逃げ込んだ捕鳥部萬（ととりべのよろず）の包囲戦の描写と「餌香（えが）の河原（藤井寺）に数百の斬られた人がある」という別の場所の描写です。捕鳥部萬については、「捕鳥部」と記載されていますが、これは「鳥取部」のことだと思われます「鳥取部」は垂仁天皇紀にその由来の記載がある由緒正しい豪族です。古事記の垂仁記にも同様な由来が記載されています。岩波版日本書紀の注には次のように記述されています。

鳥取部は記も同じ。現存史料によれば、武蔵・美濃・出雲・備中にいた。なお郡名・社名の知られるものは、河内国大県郡、和泉国日根郡（＊現在の阪南市鳥取荘）、（中略）因幡国邑美郡（＊現在の鳥取市）（中略）等であり、鳥取部の広く分布したことが知られよう。この部の中央にある上級伴造は造（後に連）、地方の伴造は臣・造・首などの姓（かばね）をもっていた。

おそらく捕鳥部萬は物部守屋の支配下にあった河内の豪族であり、臣・造などの姓を持っていたと思われます。しかし、物部守屋が敗れ逆族となった時点で姓をはく奪された為、姓のない名前で記述されたのではないでしょうか。そう考えれば近世の鳥取荘に残る捕鳥部萬という名前は極めて全体のストーリーにマッチした名前であると考えます。

「餌香の河原」に関して言えば、雄略紀雄略十三年条に雄略が餌香長野邑を物部目（もののべのめ）大連に与えたという記述があります。この記述の信憑性は別にしても餌香（大和川と石川の合流地点一帯）が物部の支配地であったことは間違いないと思われます。一方の戦いの場が物部氏の領地であれば、もう一つの茅渟県の有真香邑の戦闘も物部の敗残兵の掃討戦であった可能性は高いと思われます。

「萬は天皇の楯となって、その勇をあらわそうとするのに、調べ問うことがなかった。」という捕鳥部萬の嘆きは、突然反逆者の烙印を押され賊軍として殺された物部守屋の配下の将校の心の叫びであったと考えられます。敗軍の将が姓を付けていない例は壬申の乱の近江方将校の呼び名にも見られます。鹿深山を越え田中臣足摩呂の兵を蹴散らせたのは「近江の別将・田辺小隅」、鳥籠山で斬られたのは「近江の将秦友足」と記されています。田辺氏は史などの姓を、秦氏は造などの姓をもつ氏族です。「捕鳥（鳥取）部萬」が姓を持っていた可能性は高いと思われます。冨川氏が想像したように「本当の名前はわからない」のではなく、「本当の名前が姓を外して記されている」と考えるべきです。

冨川氏は「茅渟縣」という記述を根拠に、蘇我・物部戦争の後半の記述が評制・郡制期よりも前に成立したものと推測しています。そして「縣」制の時期に同時に令制的な秩序や文書行政の様子が描写されているので、九州王朝に残された記録でしかありえないと推測しています。しかし、河内には「志貴縣主神社（河内国総社）」、御野縣主神社、式部御野縣主神社、という「縣」の名がつく神社が存在しています。すなわち「縣」という呼び名は後世に残っているのです。近畿王朝に律令制が引かれた後、日本書紀が成立する前に、逆賊となった物部の敗残将校の嘆きにシンパシーを憶えていた何者かが、現地に残っていた記録を元に、忠犬譚のようなまとめ方で文章を記し、それが日本書紀に採用されたというのが現実ではないでしょうか。

冨川氏の論文は日本書紀に記された蘇我・物部戦争の実態を「河内戦争」という形で明らかにした点で評価されるべき論文です。蘇我物部戦争の最も悲惨な戦闘は、渋河の館の包囲戦の後で行われた河内地方全般に広がった物部配下の残党の掃討戦であったことが、この記事によって目に浮かんできます。

## 俳句

影山　武司

穭田の畝束ねたる富士の嶺
空の青研ぎ澄ましたる野分かな
革靴のきちんと揃ひ今朝の冬
鉄橋を越ゆれば甲斐の夕時雨
墓碑銘は聖書の言葉返り花
十字架の墓碑に落葉のとめどなし
早朝の冷たき息の肺に沁む
フリスビーのふはりと着地小六月
切り岸を下る小舟や帰り花
引き絞る弓弦の不動風冴る

## 編集後記

ＳＫ生

もうすぐ新しい年が来る。今年は夏の炎暑に止まらぬ物価高、そしてクマ、さらには「働いて働いて……」の高市首相の登場といろいろあった。はて、これからどうなるのか、と思うことが多い年だった。来年こそは希望の年であってほしいという思いは切たるものがあるのだが、その根拠は乏しい。うっすらと希望はあるのだが、それを根拠づける言葉が必要なのだ。仄暗い中での頼りない作業だが、来年の本誌の紙面にそうした努力が積み重ねられていくことを期待したい。

## 五七五を読む ― 十七音の響き方⑤

**憧れのハワイ航路で師を送る　若杉幹夫**

一月に九十六歳で亡くなられた大分番傘川柳会の柴田昭三郎さんへの追悼句。年賀状に「左足を傷めてからひたすら川柳投句のみに生き甲斐を求めております」とあった。県外へも積極的に投句。

巻頭にかかげたどの句にも、いつもながら作者の生きて来た足取りの確かさが感じられる。

**平凡な今日のけじめの酒を飲む　土竜**

ありふれた、かけがえのない一日を宝もののように詠った六句の中の一句。まるでロックだった。

**逆風もきっとこころの広い風　羊子**

逆風はきっと明日の風である、と作者の感性。

**寝て治るそんな若さが懐かしい　幸一郎**

その昔、仕事で徹夜を含む連続二十時間以上の実験を週に何日もすることがあったが、どこかで「まとめ寝」を入れると苦にならなかった頃が私にもあったなあ。

**大金の被害うらやむ特殊詐欺　和俊**

許せぬ特殊詐欺だが、騙されることより金がある不思議をふと思うことがあるのも事実。

**去る人へ窓一つだけ開けておく　智晴**

去る者は追わずの心、そして来る者は拒まずの心。

「窓一つだけ開けておく」器量。

**酒菓子やめた薬もやめた自然治癒　裕治**

身体第一、自力が大事。自らの回復力を頼む覚悟を見事に込めた全六句の一。

**千羽鶴いつも誰かが折っている　正彦**

世界中でいつも誰かが、「見えないところで祈っている平和」がある。

折り鶴に飛ぶ時が来た平和賞

しかし、被爆国日本の折り鶴は、まだ飛べないでいる。

**忘れ得ぬ味わい深い師の言葉　俊信**

**ありがたい心に宿る師の教え　晋一郎**

三十六歳の時に、私は初めて京都から島根への就職が決まり大学教員になった。円山公園にある店の、私には不釣り合いなほどにだだっ広い座敷の送別会で恩師が言ったはなむけの言葉は、「君、田舎教師になったらいけませんよ」だった。

間の取り方の絶妙な恩師は続けた。

「勘違いしたらいけませんよ。田舎教師は京都にも東京にもいます。どこにいても、世界に目を向けていなければ、それが田舎教師ですよ」。

「高いところを見ろ」。私は精神のあり方を言われたような気が今でもしています。

**放出をしても下がらぬ高い米　季生**

**米がない瑞穂の国で大騒ぎ　廣**

**新聞テレビ米の話題が出ぬ日なし　久二夫**

これが食の安全保障を言う国か。何ともザマのない話。

米が無い瑞穂の国の摩訶不思議

まざまざと瑞穂の国の店仕舞い

新米が出ても、コメの値段が下がるはずはない。

**平凡な日々投げてこないで変化球　静代**

直球なら速球だって受け止める、よ。

**朝来てもいつもの父の声が消え　昌恵**

「人間はいつ自分になるか」と問いかけた哲学者・鶴見俊輔は、「自分になるとは、社会の中の自分の位置に気づき、社会に向かって働きかける方向を決めることであり、そのとき人が生まれる」と言った（『人が生まれる―五人の日本人の肖像』、筑摩書房、一九七二年）。同様に、「人間は二度生まれる」とフランスの啓蒙思想家・ルソーも言っている。

「一度目は存在するために、二度目は生きるために」（『エミール』、岩波文庫）。

そうするとこうも言える。「人間は二度死ぬ。一度目は肉体が亡んだ時に。二度目は、その人が生きた記憶を誰もが失くした時に」と。

確かに「人は逝き何処へも行かぬ人になる」。何処へも行かぬから、「人は逝き遠くて近い人になる」。誰かの一番近いところに、その胸の中に生きていれば、その人は本当に「遠くて近い人」であり続ける。

**それ程は変らぬ話題飲み仲間　和俊**

**年波を肴に友と春二合　智晴**

**酒旨し問わず語りの朋輩と　邦弘**

**春風と桜に見とれ飲むワイン　幸治**

**いい友よ無口だけども酒楽し　ひろむ**

言わんでもわかるだろうと友と酒

土竜の句を含め、

それぞれに呑んで詠って酒に酔う

**知覧の旅孫は遺書読み立ち尽くす　いぶき**

戦せぬ誓いは国の背骨です。それは国の心棒。